

## 日本文学関係貴重書展示

## 『新曲』披露

## 解説資料

## 特別展の開催にあたって

大妻女子大学では、文学部日本文学科および短期大学部国文科の教員を中心として、日本文学に関する貴重な資料の収集に努めてきました。それらは、本学図書館、あるいは草稿・テキスト研究所の所蔵となり、研究と教育に活用されています。

通算九回目を数える今回の「大妻女子大学日本文学関係貴重書展示」では、二〇二三年に本学図書館に収蔵され、貴重書の扱いとなっている舞の本絵巻『新曲』を全巻展示すると共に、本学日本文学科の授業の「変体仮名読解」で用いているテキスト類の原典展示を行います。

『新曲』は、室町時代に成立した芸能である幸若舞曲のひとつで、幸若舞曲三十六番のうち、最後に追加された“新しい曲”という意味で「新曲」と名付けられた作品です。その内容は『太平記』巻第十八「一宮御息所のこと」に取材したもので、後醍醐天皇の第一親王尊良親王と御匣殿（御息所）との恋物語を、秦武文の武勇を織り混ぜつつ描いています。

本作は、『舞の本』に収められたことで読み物として広く流布するとともに、絵を伴う豪華本も数多く制作されました。その多くは冊子体で伝わる中で、本学所蔵のような卷子仕立てのものは例が少なく、大変貴重な資料と言えます。絵巻物ならではのダイナミックな世界を、どうぞお楽しみください。

なお本展示は、令和八年度大妻女子大学人間生活文化研究所共同研究プロジェクト（課題番号K二六〇八）の助成を受けて行われます。

大妻女子大学 文学部 教授 小井土守敏

## 舞の本絵巻『新曲』二軸

上 三三cm×一七六五cm  
下 三三cm×一四六二cm  
大妻女子大学図書館蔵

室町時代に成立した芸能である幸若舞曲のひとつで、幸若舞曲三十六番のうち、最後に追加された“新しい曲”という意から「新曲」と名付けられた作品。『太平記』巻第十八「一宮御息所のこと」に材を取り、後醍醐天皇の第一親王尊良親王と西園寺公顕の娘、御匣殿（御息所）との恋物語を、秦武文の武勇を織り混ぜつつ描く。『太平記』では、金ヶ崎の戦いで命を落とした尊良親王の生前の逸話としてこの話が引かれるが、「新曲」では、苦難の末に再会を果たした親王と御匣殿の末永い幸せを言祝ぐ結末となっている。

「新曲」は、版本『舞の本』に収められたことで読み物として広く流布したが、絵を伴う豪華本も数多く制作された。冊子状のものは複数確認されるが、大妻本のごとき卷子仕立てのものは、他に京都国立博物館に所蔵が確認されるのみ。もともとは卷子本であったものを屏風貼り込みとしている例が確認され、卷子本の「新曲」が他にも存在していたことは確実である。

制作時期は、大型で豪華な絵巻物類が盛んに制作された寛文・延宝頃（一六六一～一六八一）と考えられ、本文は、その頃に、奈良絵本や絵巻の詞書を数多く担当した能筆家、朝倉重賢（生没年未詳）によるものと目される。全部で十一の絵が収められ、色彩も鮮やかに残されている。十一ある挿絵が描く場面は、寛永版『舞の本』所収の「新曲」の挿絵の場面と重なり、その掲載位置も同じである。縦長の版本と、幅を取ることができる絵巻との相違によって、絵の構図は多少異なるものの、絵の構成要素は共通しており、本絵巻の図像は、『舞の本』の挿絵を参照して制作されたものであろうと推測される。

## 尊円親王筆古今和歌集能瀬切巻第四 一軸

三〇cm×七m六五cm  
大妻女子大学図書館蔵

我が国最初の勅撰集。下命者は醍醐天皇。大妻本は巻四秋上の一巻。伝尊円親王筆、鎌倉末期写。尊円親王筆の『古今集』の断簡は「能瀬切」として知られ、同切には、国宝手鑑『藻塩草』に『古今集』巻十三恋三の一葉（六行二首）があり、他に岩国吉川家蔵『翰墨帖』所収の巻十七雑上九行、藤井隆・田中登著『続々国文学古筆切入門』紹介の巻十九雑体全巻、出光美術館蔵の巻十三恋三断簡六行など数点が知られる。大妻本は、他に断簡として伝来するものに比して、巻四秋上の一巻を完備しており、同切の中でも特に価値が高いものと言える。

尊円親王は伏見天皇皇子。永仁六（延文元年（一二九八）―一二五六）。第十七世青蓮院門跡。能筆で小野道風・藤原行成の書法を参考に青蓮院流（御家流）を開いた。その筆とされるものでは、『金沢文庫本万葉集切』が有名である。「能瀬切」が尊円親王の真筆か否かには議論があるが、鎌倉時代末から室町初期の写とする点はゆるがない。

## 小倉山荘色紙和歌百人一首 一冊

枡形一七cm×一八cm  
大妻女子大学図書館蔵

百人の歌人の和歌一首ずつを選び集めた秀歌集。中でも、藤原定家が宇都宮頼綱（法名蓮生）の願いを受けて京都小倉山の山荘で選んだとされるものが有名であり、百人一首と言えはこの小倉百人一首を指すようになった。

大妻本は、伝冷泉為綱筆、江戸中期写。萌葱色菊紋に割小菱繋の緞子表紙に色変わりの料紙を用いた美装本。内題は「小倉山荘色紙和歌百人一首」。本文は定家様（ていかよう）で書かれている。冷泉為綱（一六六四―一七二二）は、上冷泉家の公卿・歌人。従二位権中納言。

## 伊勢物語 一冊

二一cm×一五cm  
大妻女子大学図書館蔵

歌物語。『在五中将の日記』ともいわれた。

在原業平の歌を語る小規模の物語群を集成したもの。

大妻本は、伝飛鳥井頼孝筆、室町後期写か。列帖装、紺地に金泥で草木が描かれた表紙。飛鳥井頼孝は、室町後期の公卿。飛鳥井雅康の子。永正一三年（一五一六）に正五位下を叙せられている。生没年は未詳。父の雅康は歌人・書家・蹴鞠の名手として知られ、書道二楽流の祖とされる。

## 建礼門院右京大夫集 一冊

二一cm×一八cm  
大妻女子大学草稿・テキスト研究所蔵

私家集。建礼門院徳子（平清盛女・高倉天皇中宮）に仕えた右京大夫の家集。平家一門の栄耀、源平争乱、平家滅亡という時代的悲劇を背景に、作者と平資盛との恋愛を軸とし、乱世を生きた女性の心情を詠み、その詞書きの多さから日記的な性格も併せ持つ。

大妻本は、江戸前期写、列帖装、竜紋の緞子表紙で、外題（げだい）は「建礼門院」。永享十二年（一四四〇）、藤原利永写本を写した旨の元奥書がある。

## 源氏物語 五四冊

枡形一七cm×一七cm  
大妻女子大学図書館蔵

物語。五十四帖。光源氏を主人公とした正編と、その後の人々の世界を描いた続編とから成る。

大妻本は、江戸初期と推定される写本（寛永五（一六二八）年の注記あり）。小筆筍に収められた、いわゆる「嫁入り本」である。本文は青表紙本系統で、ほぼ毎丁ごとに『河海抄』や『花鳥余情』などによった別筆の描き入れと朱点が施されている。

## 曾我物語 一二冊

一七cm×二〇cm  
大妻女子大学図書館蔵

軍記。十二巻。曾我兄弟の敵討ちを題材とする物語。

大妻本は、寛永頃刊（無刊記）の古活字版。『曾我物語』の古活字版は五種が知られるが、その

内、大妻本は十一行本（半葉に十一行配されることから）と分類される本。十一行本の完本は極めて稀少であるうえ、保存状態も良好で、高木利太、フランク・ホーレー、角川源義、横山重ら、著名な蔵書家や研究者の手を経て大事に保存されてきたことが、蔵書印から知られる。『大妻文庫3』5 曾我物語』に影印・翻刻がある。

## 今昔物語集 二〇冊

二二cm×一六cm  
大妻女子大学図書館蔵

平安時代後期（天永）保安（一一一〇）～一一二四（頃）に成立したと考えられる我が国最大の説話集。作者未詳。三巻一〇四〇話から成る。天竺（インド）、震旦（中国）、本朝（日本）仏法、本朝世俗の四部に分けられ、説話の内容によって分類配列される。

大妻本は、享保五年（一七二〇）の井沢長秀校訂による版行本。本文の乱れは認められるものの、この版により、『今昔物語集』は人々に流布したとされる。製版、袋綴中本。第一冊の外題は「和朝今昔物語（巻之一／世俗部）」、第二〇冊（最終巻）の尾題に「今昔物語三十和部終」とあり、『今昔物語集』のうち、日本の部分を抜き出したものであることがわかる。なお本書は、最終巻背表紙裏に文化十四年（一八一七）正月の出版広告を持つ後印本。版元は、「浪華書肆文金堂心斎橋通唐物町河内屋太助板」とある。

## 御伽草子 二三冊

一六cm×二三cm  
大妻女子大学図書館蔵

室町時代から江戸初期にかけて作られた短編の物語として巷間に広まっていた幾多の小作品の中から、享保の頃（一七一六～三八）、大阪の書店、渋川清右衛門がそのうちの二十三編を集め、「御伽文庫」と名づけて刊行して人気を博した。のちにこうした作品群を総称して「御伽草子」と呼ぶようになったが、学術的には「中世小説」「室町時代物語」と称すべきとの指摘がある。

大妻本は、「御伽文庫」として刊行された二十三編が、販売当時のものと思われる木箱に

収められたもの。その二十三編は、「文正さうし」「鉢かづき」「小町草紙」「御曹司島渡」「唐糸草子」「木幡狐」「七草草紙」「猿源氏草紙」「物くさ太郎」「さゞれいし」「蛤の草紙」「敦盛」「二十四孝」「梵天国」「のせ猿さうし」「猫のさうし」「浜出草紙」「和泉式部」「一寸法師」「さいき」「浦嶋太郎」「横笛草紙」「酒吞童子」。横長の判型は、当時流布していた現在「奈良絵本」と呼ばれる挿絵入りの写本の形式を模したものである。

（解説執筆…小井土守敏）